

ハバクク書1章1－4、2章1－4節
テモテへの手紙2章1－14節
ルカによる福音書第17章 5－10節

本日の旧約日課は、ハバクク書です。『聖書（旧約）』の中でも12小預言書という分類に入り、全体で3章しかない短い預言書です。歴史的背景は正確にわからないのですが、預言書内の記述通りならば、ユダ王国が新バビロニア帝国に滅ぼされる（BC598年）、少し前に書かれた預言です。

全体の構成は簡潔で、前半の預言者ハバククの訴えと主なる神様の答えの部分（1:1-2:20）と、後半の預言者ハバククの祈りと賛美の部分（3:1-19）から構成されています。本日の箇所は、前半部分の一部、ハバククの訴え（1:1-4）と主なる神様の答え（2:1-4）からなっています。

ハバククの訴えは、「主よ、いつまで助けを求めて叫べばよいのですか。あなたは耳を傾けてくださらない。『暴虐だ』とあなたに叫んでいるのに、あなたは救ってくださらない」（ハバ1:2）から始まります。預言者ハバククは、王国が国内的にもまた国際情勢においても混乱し、国家的、民族的危機に直面しているので、主なる神様に助けをくださいと訴えています。「暴虐」と訳されている言葉は、新共同訳では「不法」となっていました。それは続く4節に、「こうして、律法は力を失い、正しい裁きがいつまでも下されません。悪しき者が正しき者を取り囲み、そのため、裁きが曲げられています」と続いているからと思われる。この言葉は、第一の意味は、「暴力、乱暴な行為」を意味します。新共同訳は、律法を無視する乱暴な行為として、「不法」と訳したのだと思いますが、新しい訳では、ありとあらゆる面でのユダ王国における暴力的行為であるとして、「暴虐」と本来の意味に訳し、その故に間違った裁きが行われていると解釈したのでしょう。

このハバククの訴えに対する主なる神様の答えは、カルデア人の残虐さの描写です（1:5-11）。その部分は聖書日課にはありません。カルデア人は、『聖書（旧約）』の様々な個所で登場しますが、古代メソポタミアに存在したセム系民族で、古代オリエント一帯を支配した新バビロニア王国（カルデア王国）を興した民族です。主なる神様は、そのようなカルデア人を正しい存在と認めているわけではありません。1章11節では彼らについて「**こうして、風のようになぎ倒して去って行く。彼らには罪がある。己の力を神とするからである**」と述べているからです。しかし、そのような暴虐で罪なるカルデア人が、ユダ王国を滅ぼすと語るのです。

それに対して、ハバククは再度訴えます（1:12-17）。この部分も聖書日課にはありませんが、そこにおいてハバククは、主なる神様が聖であり、正しく、またイスラエルを裁く方であるという大前提のもとに、そして、ユダ王国の人々に悪があることを認めたいうえで、しかし、ユダ王国は、残虐さをもって他国を侵略しているカルデア人よりも悪いのでしょうかと訴えます。

預言者には様々な人がいますが、ハバククは、自分の王国の間違いを認識し、

また人々に指摘しつつも、もっと他には悪い王国がある、ユダ王国は、悪くなったとはいえ、まだましではないかという気持ちがある預言者のようです。それゆえに、最後に「だからといって、彼らはその引き網を使い続け諸国民を容赦なく殺してもよいのでしょうか」(1:17)と訴えます。このハバククの二番目の訴えに対する答え、それが本日の旧約日課の後半部分です。

主なる神様の答えは、「この幻を書き記せ。一目で分かるように板の上にはっきりと記せ」と始まります(2:2)。ここにある「幻」という言葉は、見る幻ではなく、精神的に感じとる幻です。それゆえに「啓示」と訳してもよい言葉です。それゆえに、「板の上にはっきりと記せ」と命じられるのです。見た映像を書けということではなく、感じた言葉を記せということです。「板の上」という表現は、十戒を思い起こさせますが、その時代は、板・粘土版に文字を書くことが主流でしたのでそう表現されているのです。いずれにして、誰で読めるように示しなさいということです。そして、その部分の最後は、「見よ、高慢な者を。その心は正しくない。しかし、正しき人はその信仰によって生きる」で終わります。『聖書』全体を通して有名な言葉です。パウロも律法との関係の教えの中で引用しています(ロマ1:17、ガラ3:11)。

「高慢な者」とは、イスラエルの内部の人というよりも、これからユダ王国を滅ぼそうとしているカルデア人(バビロニア帝国)のことでしょう。しかし、主なる神様は、その高慢な者を通して、自分の民・王国を滅ぼさせ、何が本当の高慢さであるかを示し、何が罪であるか、そして何が大切であるかを示すのです。カルデア人の悪は、自分の王国には確かに悪い部分もあるが、他の王国と比較したらまだましではないか、と考えたいハバククの思いをはるかに超えています。なぜならば、主なる神様への信仰によって生きるならば、思いあがることもなく、謙虚に正しく生きるはずであるからです。

この「信仰」という言葉は、ことに宗教改革以後、プロテスタント教会において、律法の対義語として用いられることが多くありました。現在は、そのような『聖書』における信仰についての一面的なとらえ方への反省が出てきています(信仰義認という考え方が、『聖書』にまったくないということではありません)。その反省の一つといえると思いますが、新しい聖書協会共同訳では、「信仰」に「別訳」として「真実、誠実」とあります。『聖書』が示す、主なる神様を信じるということは、ただ熱心に信じるだけではなく、「真実さ、誠実さ」をもって信じることでもあるからです。そして、それは主なる神様だけではなく、主なる神様が創造された被造物、すなわち信じる人が出会うすべての他者に及ぶのです。それゆえに主なる神様への「信仰」が生み出す事柄は、「正しいこと」に他ならないのです。それが『聖書』が示す信仰に他ならないのです。

福音書のイエス様は、信仰の増量を求める弟子たちに対して、謙虚さを求めました。信仰と謙虚さ、これらは本来不可分な事柄なのですが、弟子たちはそう考えていなかったからでしょう。わたしたちもイエス様を信じる礼拝を通して、信仰が深まり増える歩みをしていきたいと思います。そして、同時に謙虚さを増やしたいと思います。その歩みから、主なる神様の深い愛を示したいと思います。